

コロナ禍だからこそ「知」の宝庫である 図書館活用の勧め

看護学科助教 **神成** **真**
カンナリ マコト

COVID-19 の影響で全国的に臨地実習に行くことができず、患者さんとの関わりが制限されています。本学も例外ではなく病院実習が短縮され、学生は学びが少ないと感じていることと思います。

臨地実習に行く前には授業で“疾患”について学び、臨地実習に行くとも患者さんと直に接して“病（やまい）”の話聞き、病気を患った患者さんがどのような体験をしているのかを知り、良い学びが得られます。“疾患”と“病”の言葉を使い分けましたが、“疾患”は病態・症状・経過予後などが明確で診断名として〇〇病となる医学的な用語であるのに対して、“病”は身体や心のどこかが健康を損なっていて本人の自覚的な体調不良を示す用語となります。

図書館にはこの“疾患”についても“病”についても学ぶことができる専門書が多数あります。例えば、アーサー・クライマン著の「病いの語り」には、3章から14章にかけて慢性疼痛症、糖尿病、喘息などの慢性疾患を持つ患者さんの個別的な「病」の経験が詳細に記載されています。それはさながら臨地実習で得られる「知」に匹敵すると思います。他にも、精神疾患を抱えた患者さんが、自分の病気についての理解を深めていく語りが書かれている「べてるの家の当事者研究」という本もあり、患者さん自身が自分達の症状や対処方法をどのように考えているかを学べます。

図書館の活用法として、興味・関心のある棚でどのような本が置いてあるのか見ることも良いですし、図書館のPCを使って“蔵書検索”に頭に浮かんだキーワードを入力してみると、その棚にはなかった思いがけない文献を見つけることができます。また、図書館のPCから“医中誌 Web”などにキーワードを入れて検索すると研究論文を探すことができ、最新の知識を得ることができます。図書館の3階には各学会誌がありますし、図書館にない論文は複写依頼ができます。

図書館には様々な分野、視点から学ぶことができる専門書が豊富にあり、学びに事欠くことはありません。図書館は「知」の宝庫です。人にとって「知」は財産です。コロナ禍の今だからこそ大学図書館に足を運び、今まで知り得なかった新たな「知」を得にいきましょう。

文献

・ Arthur Kleinman (1988). The Illness Narratives : Suffering, Healing & the Human Condition. Basic Books. 江口重幸, 五木田紳, 上野豪志 (1996). 病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学. 誠信書房.

(本学所蔵あり 493.1||K14)

・ 浦川べてるの家 (2005). べてるの家の「当事者研究」. 医学書院.

(本学所蔵あり 369.28||U82)

